

りたい渡り鳥。

二十一、父上母上、妻や子は、便りせぬ身を、語り合うてか案じてか、心に祈る星空を、ああ懐かしの北斗星。

二十二、南を目指し幾百里、アムール川を遡る、シベリア鉄道鈍い旅、捕虜の鎖は解き放されて、感極まつてただ涙。

二十三、よくもここまで生き抜いた、命も春に還り咲き、帰国列車が気にかかる、いざ乗船に足早く、残されまいと気が騒ぐ。

二十四、懐かしの白衣の乙女赤十字、ああ本当に帰れたとただ涙、航跡を眺め感無量。

虜囚、流涙、帰国の希望も失われた二年近く、未だかつて味わったことのない貴い体験をつんで、昭和二十二年七月、待望の故郷へ向けて、波穏やかな日本海帰還船遠州丸にて、憧れの故国、舞鶴港へ。

れの人はほとんど現役の召集まではされていない、私どもが一番最後であります。

私は、昭和二十(一九四五年)の三月末付けで旧制第二高等学校文科というのを卒業させていただきました。これも戦前の最後の臨時措置で、急に繰り上げ召集でありますから、普通にいけば、もう一年あるはずだったわけでありす。そうすると、戦争に行くことは免れたわけでありすが、その時代でありますから、特に文科系が繰り上げ召集をされました。理科系は残されたんです。文科系が現役で召集された。

旧制高等学校は文科と理科の二つに分かれております。文科系というのは、そこを卒業すると、その当時の帝国大学の文学部か経済学部か法学部へ進む。理科系は工学部、農学部、医学部、お医者さんです、そういう方に進んだわけでありす。

私どもは昭和二十年の三月の末に、本来は希望者を集めて入学試験をやって、文科系に進むのがありますけれども、戦争が苛烈になってまいりま

## シベリア抑留の思い出

福島県 橋本 宗明

私はシベリアに三年ぐらいいたけれども、そのこともあまり多く語ったことはない記憶しております。高等学校で二十年間生徒の前でいろいろ話をしてきましたけれども、その間にもあまり多くを触れたことはなかった、こういうふうに思います。したがって、私がまとめて体験をご紹介しますのは全くの初めてでございます。

いろんな意味で、私の人生、物の考え方に多くのことを残してくれたのは、間違いなく抑留体験でございます。まともはそのことに触れることに、ある意味で心の中で恐れを感じていたということもあろうかと思えます。

一応私の経歴をやや詳しく申し上げますが、私は現役の兵隊としては一番最後の初年兵でございます。大正十四(一九二五)年生まれ。十五年生

して、特に昭和二十年の三月十日などは大空襲で東京が焼野原になった。こういう事態でありますから、文学部希望の願書を出して、その上で内申書によって書類選考で各大学に合否が分けられたんです。

大体が旧制高等学校を出た者は、優先的にどこかには入れるようになっていたんです。第十希望ぐらいまで書かされて、成績の順によって割り振られた。こういう選考の仕方であります。私は幸いにして第一希望のその当時の東京帝国大学の文学部の国文学科を希望して、そこに合格できました。四月一日付けで入学することになっていた。

ところが、三月二十四日に召集令状が参りまして、三月二十七日に仙台の東部第二十七部隊、予備部隊であります。そこに入隊いたしました。その当時はいわゆる二等兵であります。星一つ。

二等兵で現役入隊いたしまして、それから、五月初めに当時の朝鮮の羅南の方に転属命令で、午前六時に仙台駅を出発して、車が用意してあって、

中にだれが乗っているか分からないようにさせられて、そして博多を経由して、釜山の港に上陸して、一路、今の北朝鮮の羅南に転属になりました。

羅南に着いたのは五月で、五月から七月ころまで。鮮満国境の豆満江という川が流れておりまして、それが国境であります。豆満江の川近くの陣地構築。気のきいた機械などさっぱりないので、スコップとツルハシとモッコで山を掘って陣地構築という生活をしておりまして。それが二カ月くらい続きました。

それで八月十五日を迎えて、ソ連軍が満州を経由して、北朝鮮の方まで進軍を始めて、四キロぐらいい手前までソ連軍が来たときに終戦を迎えた。そこで武器を返納して、満州の間島というところに集結させられた。北朝鮮で武器返納という命令で、二等兵は馬と大砲しか持ってません。小銃、鉄砲は持っていませんので、馬を放して、満州の間島に移らされた。その地に、一カ月ぐらい収容されておりました。それから、東北へしばらく行

寒くなるといつても、日本とはけた違いでありまして、零下三五度ぐらいになる。零下三〇度ぐらいまでは野外作業をさせられるということで、今まで体験したことがなかったような生活が始まる。そのうちにその年の暮れからシラミが物すごく発生し、そのシラミが媒介する回帰熱という熱病が非常に蔓延いたしました。栄養失調と合わせて、その回帰熱で倒れる者が非常に多かったです。

年を越えて二月ごろだったかと思いますが、私もその回帰熱に冒されて、入院をいたしました。私が入院したころ、アメリカ製の、梅毒の特効薬だったんですが、サルバルサンという注射液が入ってまいりまして、幸いにして、そのサルバルサンによって、一命を取りとめることができました。そういう意味で死線を越えてやっとその年は生き延びることができたという経験を持っております。その当時亡くなった人の数は、詳しい数字の統計も恐らくないんだらうと思いますが、かなりの人数だったと思います。何%ぐらいか、千二百人

軍させられて、汽車に乗せられた。それも貨物列車のような列車でした。二段に仕切ってあって、二階と下と分かれている貨車に乗せられて三日くらい動いていました。とまったり、進んだり。

その間、ロシアの警戒兵がついて、「ウラジオス トック・東京ダモイ」ということで、ウラジオス トックを通って、東京、日本に返すんだという宣伝をうのみにして、大体はみんなおとなしく列車の進行に任せておった。

着いたところが、アムール川の流域のコムソモリスクという町でありました。コムソモリスクという町に着いて、その収容所に収容されました。コムソモリスクというのは、アムール川の長い流れの中のほぼ中央にあります。

その第五収容所というところに収容されました。千二百人ぐらいいたかと思いますが。いろんな使役に毎日駆り出されました。そういう生活でありました。

そのうちにだんだん寒くなってまいりました。

いた収容人員の、ちよつと見当もつかない数が亡くなりました。一番被害が多かったのは、昭和二十年の暮れから二十一年の初めだと思います。私は第五収容所から第一収容所の中央病院というところに移されました。そこで半年ぐらい入院生活を送りました。それから、ある程度元気が出てきたところで、第十分所というところに移されたこと記憶しております。

収容所に戻って、コルホーズ、ソホーズという農場の仕事に移されてしばらく、昭和二十一年ぐらいは確か五分所にいたような記憶であります。五分所からまた移されました。第何分所であったかはつきり記憶しておりません。今度は、その当時体験の方もおられるかと思いますが、階級章を外せという運動がありました。将校の方はあまりいなかったです。将校の方は別にされて、准尉ぐらいの人がおられたようです。階級章を外せという運動が起こって、いわゆる民主化運動といいました。民主化運動というのは、内部から起こ

った運動なのか、外部からの指導があったのか、私らはよくわかりませんが、民主化運動というものがあって、階級章を全部外すという事態になりました。今までの兵、下士官、将校という階級章を外す。全部取り去るということがあって、だんだん選挙で選ばれるという形になってまいりました。

私は、選ばれて、中隊長にさせられまして、昔の軍でいえば、将校の仕事させられておりました。百二十人ぐらいの一個中隊という編成でございました。

その中でいろいろ感じたことはございますけれども、まず第一に、目で覚えた言葉というものはあまり役に立たない。旧制中学の一年から、英語の科目はずっと習いましたし、入学試験の科目でも非常に重要な位置を占めました。ですから、日本の英語教育は難解、意味を読み取るということとは重点的になされておりましたけれども、話す方はあまりなされていなかった。私も旧制中学で

がない。何かは仕事をしているわけです。向こうの監督に何かの仕事をしていることを計算させればいいわけです。

例えば、トラックから荷物をおろすという仕事をする、その仕事のために働いた時間は何時間何分で、その仕事の計算は、一時間当たりどれだけで、終わって計算すれば、ちゃんと労働賃金が出てくる。こういう計算です。

ここで私が感心したのは、壁塗りなんか、左官の仕事ですが、平らなところを塗ると、角をつくる仕事は別なんです。平らなところは面積で計算する。角をつくるのは長さで計算する。ノルマが別なんです。それを合わせていくと、かなりの労働賃金になるんです。まともにやっている人は八時間ちゃんとやっていけば、一二〇%ぐらいの仕事になるはず。そういう計算を監督と折衝しながらストラッカーという証明書に書かせる。

私が立ち会った監督は非常に人のいい人で、私の「ハシモト」をロシア語のスペルで書くと、H

英語も学び、第二高等学校の文科ではドイツ語のある部分をかじっておりましたので、ロシアに行つてロシア語というのを今度は話しておりますが、これも教科書で学ぶような勉強の仕方はできません。基本的なことを書いたものは私のもとにあって、そういうものを基本にして、単語を覚えていくと、ロシア人のしゃべっていることも、単語のやりとりである程度意味が通じるんです。

私も片言ながらロシア語を勉強して、特に中隊長に選ばれてから、ロシア人の監督と折衝する責任にありますので、ロシア語の単語を並べて、何とか意思の疎通を図ることができた。

シベリアの体験の中で、特に私の記憶に鮮やかに残っているのは、ソビエトの労働法です。いわゆるノルマの制度。ノルマの制度というのは非常に合理的にできています。私らのやった仕事はレングづくりの建物でありますけれども、ノルマという考え方からいえば、八時間労働の仕事をする場合に、量的に計算すると、ロスタイムというの

を読まないで、「アシモト、アシモト」と、彼は言うていました。「アシモトは『ヒドル』、強い」というんです。強いのではない。合理的に考えれば、そういう計算で百二十人の部下に当たる人たちの労働を正當に評価させれば、必ず一〇〇%を超えるわけです。

そういうノルマの考え方は、非常に合理的なものだ。例えば、この若松辺の建物にしても、ノルマで計算して、面積など全部計算していくと、幾らでできるはずだという計算ができるはず。そうすると、いわゆる元値といいますが、見積もり価格、こういうものが正當になされれば、競争入札というものもつと合理的にできる。私の本職からいえばまるで違う仕事ですけども、こんな考え方を学んでいったように思います。

それから、特に抑留生活の中でしみじみと感じたことは、私たちの収容所には在満の召集の方が非常に多かったんです。在満の召集の方というのは三十代、四十代の人たちで、にわかには召集されて、

軍隊に入れられて捕虜になったという方たちです。特に満州などでは、日本軍の人たちが、上層部の人で、世間的にいえば経歴も立派だし、社会的にも地位の高い人たちがいっぱい召集されて来ておりました。

どうしてもそういう方たちは、ある意味でいうと、体力的にも抵抗力が低いといえますか、そういう方で亡くなられた方が非常に多かったです。そういう方たちに接して痛感しますが、人間というのは、飢餓状態において、その人の本音の値打ちが出てくる。現在の日本のように、大変飽食の時代に生きていると、本当の姿は見えませんが、それでも、飢餓状態になると、その人の本質、本音が出てくる。そういうことを学ばせていただいたいと思っております。

確かに、つらい思い出もいっぱいございましたけれども、現在から考えると、マイナスの体験ばかりではなくて、プラスの面もあった、こういうふうに思っています。したがって、私なども、

昭和二十三年の九月の末に復員いたしました。復学しましてから、東京大学という一種の権威主義の塊のような集団に対しては、一種の反感を持っていました。いろんな意味で、大学の生活で思わない人間関係ができてまいりますので、一概にだめだということではありませんけれども、プラス面とマイナス面を持っていると思います。

語り継ぎたいことといえば、人間の英知を集めれば戦争を回避できる方向に動いていくことを願いたい、こういうふうに思っています。